

Tamagawa Academy - IB Division

NEWSLETTER

Issue 02

June 2026

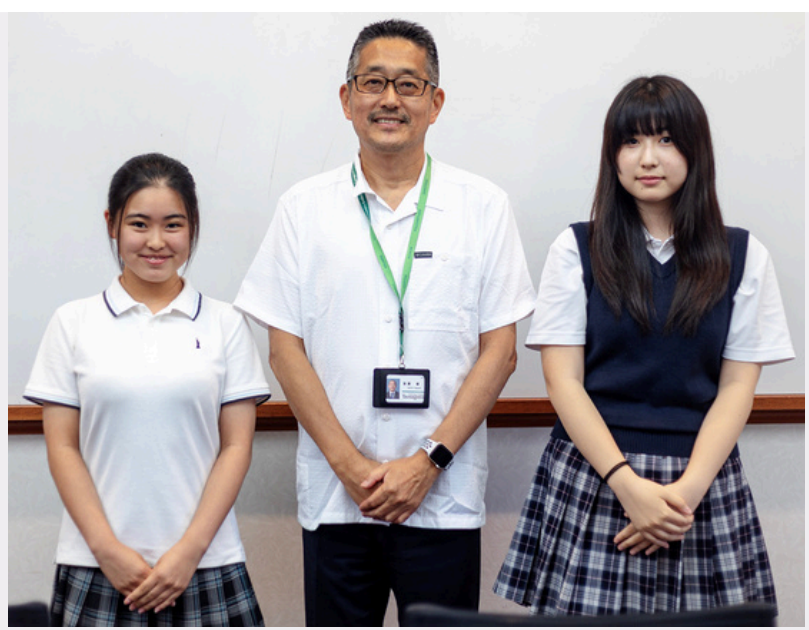
Business day

生徒たちが、日本最大級かつ最も歴史ある学生運営のビジネスコンテストの一つ、「KING」に出場しました！

Learner Profile awards

一人ひとりの小さな行動とポジティブな姿勢が、私たちのコミュニティに、未来へと続く大きな影響をもたらします！

Mr. Furnival's Message



Education and the Future

今月の特集インタビューでは、生徒たちが学園教学部長の後藤先生を訪ね、その教育のビジョンについてのお話を伺いました。情熱と思いやりに満ちた指導の重要性、そして学業面だけでなく、思慮深く責任感のある「一人の人間」として生徒が成長するために学校ができることとは何か。先生の熱い想いに迫ります。

Student Council

今月は、生徒たちの最近のプロジェクト活動と、これからの計画についてご紹介します。

Trial lessons

今月、未来の仲間となるかもしれない受験生の皆さんがキャンパスを訪れ、体験授業を通して、玉川学園のIBプログラムならではの魅力を体感されました。

Parent Class Observation Day

5月13日、今年度初となる授業参観を開催いたしました。多くの保護者の皆様をお迎えし、生徒たちが生き生きと学ぶ姿をご覧いただけたことを大変嬉しく思います。また、参観後に行われたセッションでは、ファーニバル先生より「教育におけるAIの活用」についての説明が行われました。

Mother's day charity bouquet project

Sophia Refugee Support Group

WSC Tokyo round

English Drama Club

Book of the month



Mr. Furnival's message

ニュースレター第2号へようこそ。

5月のIB Divisionは非常に活気にあふれた1ヶ月でした。児童生徒たちの成果やそれぞれの経験についての記事を、ぜひ楽しんでお読みいただければ幸いです。

教師という職業において最も報いを感じる瞬間のひとつは、児童生徒たちがリーダーシップを芽生えさせていく姿を見ることです。先日行われた入学希望者向けの体験授業では、ボランティアの生徒たちがIBコミュニティの模範となる姿を見せてくれました。自信を持って参加者を迎え、熱意を持って活動をサポートし、初めての環境に緊張している方々を温かくもてなす姿は、まさに卓越したリーダーシップそのものでした。一日を通して、彼らはその優しさ、成熟した振る舞い、そして真摯な態度をもって、玉川学園が大切にしている価値観を体現する模範となってくれました。彼らの責任感ある姿勢のおかげで体験授業はスムーズに進行し、また、コミュニティを大切にしているその姿勢は、玉川学園への入学を検討されているご家庭のために、温かくポジティブな雰囲気を作り出す大きな力となりました。自ら進み出て、学校コミュニティのアクティブで思いやりのあるメンバーとして行動してくれた生徒たちを、私たちは心から誇りに思います。彼らの行動が、周囲の人々に良い影響を与え、誰もが自分自身の最善を尽くせるようなインスピレーションとなることを願っています。

また、児童生徒たちが継続して取り組んでいる奉仕活動 (Service) や、学校内外に与えているポジティブな影響についても、私たちは大きな誇りを感じています。こうした行動は、IBの理念と玉川学園の「全人教育」の根幹にある価値観を反映しています。つまり、学問的な発展だけでなく、思いやりがあり、責任感を持って社会に貢献できる人間を育てるという考え方です。奉仕活動を通じて、児童生徒たちは共感力、リーダーシップ、そして誰かのために意味のある変化をもたらそうとする強い意志を示してくれています。このニュースレターの記事を通じて、それぞれの活動や振り返り、社会への貢献を知っていただき、読者の皆様に新たな気づきや感動をお届けできれば幸いです。

今月の私にとってのハイライトのひとつは、Grade 11の Rさんと Mさんが、後藤先生に玉川学園での経験についてインタビューする様子を見守ったことでした。生徒たちが先生と堂々と向き合い、これほど思慮深い対話をリードする姿を見られたのは素晴らしい瞬間でした。また、後藤先生にとっても、二人が1年生だった頃に教えていた日々を思い出す、幸せな再会のひとときとなりました。このような瞬間こそが、玉川学園での生活の特別な側面であり、長い年月をかけて育まれる強い信頼関係とコミュニティの絆を象徴しています。

前期の後半に入るにつれ、アセスメント (評価課題) の機会が増えていきます。児童生徒たちが計画的かつバランスの取れた方法で準備を始めることが重要です。教科の知識も大切ですが、それ以上に「自己管理能力 (Self-management skills)」に勝るものはありません。ノートを整理し、復習の計画を立て、時間を有効に使うことは、これからの数ヶ月間において極めて重要です。こうした習慣は、学業の成功を支えるだけでなく、児童生徒たちがそれぞれより自立し、振り返り、責任感のある学習者へと成長する「IBの学習へのアプローチ (ATL)」を体現するものとなります。

Oliver Furnival
Head of IB Division



LEADERSHIP COMMENTS



Mr. Cook

The Leap to Grade 7: New Challenges, Fresh Spaces, and the Beautiful Game

7年生への飛躍：新たな挑戦、新しい空間、そして素敵な試合

中学校への進学は、いつの時代も大きな節目です。今年の7年生たちも、学校生活の新しいリズムをしっかりと掴み始めました。環境や周りからの期待、日々の生活が大きく変化する中、生徒たちがこれまでの経験について素晴らしい率直な声を届けてくれました。

Raising the Academic Bar

高くなる学習のハードル

今年、7年生が最も変化を実感していることの 하나가、教室での学習です。MYP（国際バカロレア中等教育プログラム）のYear 3の評価基準への移行に伴い、学習面への期待値が一段上がったことを生徒たちはすぐに察知しました。

評価基準がこれまでより格段に厳しくなったことは間違いありません。しかし生徒たちは、このレベルの引き上げを驚くほど成熟した態度で受け止めています。これらの新しい指標が、自らの思考を広げ、スキルをより深めるために設定されたものであることを、彼らはしっかりと理解しているのです。

もちろん、勉強ばかりではありません！中学生活には新しい「楽しみ」もあり、学年全体で圧倒的な人気を誇っているのが「ベランダ」です。教室のすぐ外にアウトドアスペースがあることは、生徒たちのウェルビーイング（心身の健康）にとって大きなプラスとなっています。

リフレッシュ： 授業の合間に、心地よい外の空気を吸うのに最適。

交流の場： 友達とおしゃべりをして盛り上がるお気に入りのスポット。

エネルギーチャージ： 次の授業に向けて、心と体をリセットできる最高の場所。

Summing It Up: The Beautiful Game

まとめ：素敵な試合

7年生としてのこれまでの学校生活を振り返ってもらったところ、非常にシンプルで、かつ等身大の答えが返ってきました。多くの生徒にとって、この新生活のハイライトは、まさにこの一言に尽きるようです。それは「サッカー」。

昼休みの白熱した試合、ピッチの上で生まれる仲間意識、あるいはただ思い切り走ってエネルギーを発散する時間。スポーツは今年も、この学年を一つにする最高の共通言語であり、強い絆となっています。

Looking Ahead...

これからの活躍を楽しみに...

新しい環境への移行を、これほどスムーズに成し遂げた7年生を私たちは本当に誇りに思います。より難しくなった評価基準への挑戦から、ベランダでのリフレッシュ方法のマスター、そしてもちろんサッカー場での大活躍まで、彼らはまさに中学校生活を自分たちのものにしていきます！



LEADERSHIP COMMENTS



Ms. Takahashi

Mid-term 1 が終了しました。進級後、初めての節目となるこの期間を通して、児童生徒一人ひとりが新しい環境の中で懸命に歩みを進めている姿を、日々頼もしく感じています。

学習において新たな目標を立て、日々努力を積み重ねることはもちろん大切です。しかしそれと同じくらい、「新しい挑戦をすること」も大切にしてほしいと願っています。

誰かに評価されるためではなく、誰も見ていなくても誰かのために行動すること。自分の役割を超えて、一步踏み出してみることに。その積み重ねが、人としての成長につながっていくのだと思います。

玉川学園の全人教育における「労作」も、単なる作業や奉仕活動ではありません。自ら考え、行動し、仲間や社会のために力を尽くす経験を通して、人間性や責任感、他者への思いやりを育てていく大切な学びです。知識だけでは得られない“生きる力”を育むものだと感じています。

5月には、ビジネスコンテストへの挑戦や体験授業のサポートなど、多くの場面で生徒たちが主体的に行動する姿を見ることができました。自ら手を挙げ、挑戦し、周囲のために動くその姿はとても素敵でした。

そして6月はいよいよ音楽祭に向けた練習が本格的に始まります。クラスでひとつのものを創り上げる過程の中で、協力することの難しさや楽しさを経験しながら、また新たな成長を見せてくれることを期待しています。

10年生の生徒たちは、現在IB DP（ディプロマ・プログラム）についての理解を深めているところです。各教科の担当教員による、科目選択に関するプレゼンテーションも行われています。6月3日（水）には、Grade 10の生徒が12年生の先輩たちにDPでの経験について直接質問できる機会が設けられています。また、7月8日（水）には、科目選択に関して個別に質問がある10年生の生徒および保護者の皆様を対象に、DP各教科の担当教員との個別面談の予約を受け付ける予定です。

一方、12年生はいよいよ模擬試験（Mock Exams）が目前に迫っています。生徒たちはIA（内部評価）の仕上げや試験勉強に非常に熱心に取り組んでくれました。彼らがこれまでの努力の成果を十分に発揮できるよう、心から応援しています！



Ms. Wei



LEADERSHIP COMMENTS



Mr. Serpico

今年度に入り、MYPおよびDPの両プログラムにおいて、ティーチャーメンタープログラムのさらなる充実に重点的に取り組んできました。ティーチャーメンタープログラムとは、児童生徒一人ひとりに教員（多くの場合はホームルーム担任）をつけ、学習面での成長、社会性・情緒面でのウェルビーイング、そして学校生活全体を継続的に支援するという仕組みです。研究では、学校とのつながりを感じている生徒ほど、学業面およびウェルビーイングの成果が高まることが一貫して示されています。学校への帰属意識が高い生徒は、成績やテスト等の結果の向上、安定した登校、そして学習への積極的な参加につながる傾向があります。また、82件の研究を分析した大規模なメタ分析でも、中等教育段階において学校への帰属意識と学業達成の間に継続的な関連が確認されています。

学校規模や学級規模が大きい環境では、児童生徒たちは多様な人間関係を築く機会を得ることができます。一方で、そのような環境だからこそ、教職員との深い信頼関係を築くことが難しくなる場合もあります。メンタープログラムは、この課題に対応することを目的としており、すべての児童生徒が定期的に対話し、支援を受け、自分のことを理解し後押ししてくれる信頼できる大人とつながることを目指しています。

今後もこのプログラムをさらに発展させ、児童生徒一人ひとりとのより強く意味のある関係づくりを進めていきたいと考えています。その関わりを通して、児童生徒たちが自信や学校への帰属意識、レジリエンスを育み、学業面だけでなく人としても長期的に成長し続けられるよう、学校全体で支えていきたいと思えます。



Mr. Iizuka

新学年がスタートして2ヶ月です。ゴールデンウィークが終わると、緊張感もなくなり細かい問題があらわになってきています。服装、他者に対する言動、授業態度、、異変を感じたその時その場で、周りの大人が声をかけてあげることが大切です。もちろん児童生徒自身が気づき軌道修正ができることが理想ですし、そのための声かけでありたいです。



LEADERSHIP COMMENTS

新年度が始まって2ヶ月。新しいクラスの雰囲気にも慣れ、6-9年の児童生徒たちがグラウンドや教室でエネルギーに活動する姿を見て、私自身も日々パワーをもらっています！

全力で駆け抜けた2ヶ月だった分、そろそろ心身ともに疲れが出てくる頃かもしれません。「体」と「心」は繋がっています。体育の授業と同じで、最高のパフォーマンスを発揮するためには、適切な「リカバリー（休息）」が欠かせません。しっかり食べて、しっかり眠る。自分の心と体の声に耳を傾ける時間を大切にしてくださいね。

皆さんが心も体もタフに、そして自分らしく輝けるよう、これからも全力でサポートしていきます。何かあればいつでも、気軽に声をかけてください！



Mr. Osawa



Mr. Soai

忙しい時ほど自分の心を無くさない。他者を尊重して、多様性に感謝する。

6年生の児童たちは、授業に必要な教材を揃え、身の回りを整えるといった、学習への準備習慣がしっかりと身に付いてきました。教員たちの目から見ても、IB MYPプランナーが頻繁に活用され、児童たちの「毎日の必須アイテム」となっている様子が伺えます。MYPの初年度から、このような自己管理能力（セルフマネジメント・スキル）が発揮されているのを見るのは、非常に喜ばしいことです。



Mr. Hinchey



GOTO - SENSEI

“...be a proud Tamagawa-ko!”

(立派な玉川っ子になってください！)



11年生のRとMが、学園教学部長の後藤先生にインタビューを行いました！

後藤先生は、彼女たちが1年生だった頃の小学部長でもあります。玉川の教育理念を深く理解されている後藤先生は、二人のために貴重なお話やアドバイスをたくさん聞かせてくださいました。

玉川は生徒を大学進学や将来の仕事だけではなく人生そのものに向けてどのように準備させることができると思いますか？

後藤先生は、玉川学園では知識や学力だけではなく、「人としてどう生きるか」を大切にしていると話していました。その考え方の中心には、小原國芳先生の次の言葉があるといえます。

「神様と人様に喜ばれる人になりなさい」

これは、自分の利益だけを考えるのではなく、正しい行動をすること、周囲の人を大切にすること、社会に貢献することを大切にできる人になってほしいという意味だと説明してくれました。

後藤先生は、そのような人は社会に出てからもどんな場面でも信頼され、活躍できると考えています。また、玉川学園が大切にしている教育は、単に受験や就職のためではなく、人生全体を豊かに生きるための土台を育てる教育なのだと感じていると話していました。

人生に影響を与えたり、ご自身を励ましてくれたりした先生との思い出を教えてください。

後藤先生が特に影響を受けた先生として挙げたのは、玉川学園に先生として働き始めた1年目の時に出会った小学校の音楽の先生です。その先生は約320名もの児童を担当していましたが、一人ひとりのために丁寧にポートフォリオを作成していました。ポートフォリオには、児童の作品の写真や先生からのコメント、励ましのメッセージなどがまとめられており、卒業時に子どもたちへ贈られていました。

後藤先生はその姿に深く感銘を受け、「自分もこんな先生になりたい」と強く思ったそうです。完全に同じことを実践するのは難しかったものの、その経験はご自身の教育観に大きな影響を与えました。学級担任になってからは、児童の作品や日々の日記を大切に、記録として残したり共有したりすることを心掛けてきたそうです。また、玉川学園が長年にわたりポートフォリオや学習記録を重視してきたことは、IB教育の考え方とも深くつながっていると感じているそうです。



学校生活で最も印象に残っている思い出は何ですか。

後藤先生にとって最も思い出深いのは、部活動での経験です。高校時代からトランペットを始め、吹奏楽の活動に魅力を感じて玉川大学へ進学しました。当時の玉川学園の高等部吹奏楽部は、5年連続で金賞を受賞するなど素晴らしい実績を残していました。

また、大学時代には横浜大洋ホエールズの私設応援団でトランペットの演奏もしていたそうで、さまざまな球場へ足を運び、仲間達とチームの応援を行ったそうです。そのような経験は忘れられない思い出になっていると話していました。



素晴らしい教師になるためには、どのような資質が必要ですか？

後藤先生は、良い教師に最も必要なのは「子どもが本当に好きであること」だと話していました。その中で、小原先生の

「子どもと遊べる人のみが教育する権利あり」

という言葉を紹介してくれました。

ここでいう「遊ぶ」とは、単に一緒に遊戯をするという意味ではなく、子どもと同じ目線に立つこと一緒に考えること、一緒に学ぶこと、子どもの気持ちを理解しようとする、を意味しているといいます。

後藤先生は、玉川にはそのような教師が多くいるからこそ、児童生徒たちも学校生活を楽しく感じられるのではないかと話していました。また、教師は児童生徒の上に立つだけではなく、生徒たちの中に入り、一緒に成長していく存在であるべきだという考えを語っていました。



これからの玉川学園の未来について、どのようなビジョンを持っていますか？

後藤先生は、玉川学園が「日本一、世界一の学校」であってほしいと話していました。ここでいう「世界一」とは、単に偏差値や進学実績だけを意味するのではなく、

「生徒、保護者、教師」

すべての人にとって誇りに思える学校であることを意味していると話してくれました。また、卒業生たちが社会に出た後も玉川で学んだことを大切に、その良さを周囲に広げていくことで、「玉川ファン」が増えていく学校になってほしいとも語っていました。実際に、親子三代で玉川に通っている家庭もあることを例に挙げながら、長い歴史の中で愛され続ける学校であってほしいという思いを伝えていました。

玉川学園の今後についてどのような発展を期待していますか？

後藤先生は、玉川学園がこれまで大切にしてきた理念や伝統を今後も発展させていってほしいと考えています。特に、国際理解を重視する姿勢など、IBの教育理念と玉川学園の理念には多くの共通点があり、その親和性の高さからIBが導入されたと教えてくれました。

また、玉川学園は以前から国際的な視野を大切にしており、國芳先生も日本だけでなく世界へ目を向けることの重要性を伝えてきました。さらに、実際の体験を通して学ぶ「経験教育」や「労作教育」といった玉川ならではの教育も大切な伝統であると話していました。

後藤先生が特に大切にしてほしいと考えているのは、音楽や歌の文化です。キャンパス内で生徒たちの歌声が聞こえる環境をとて魅力的だと感じており、それは玉川学園ならではの強みの一つだと考えています。これからも玉川学園らしさを形づくってきた伝統を大切にしながら、さらに発展していくことを期待しているそうです。

最後に生徒たちへのメッセージをお願いします。

最後に後藤先生は、IBのDP課程は非常に大変だと思うが、それを乗り越えることには大きな意味があると励ましてくれました。

特に、自分で考える力、困難を乗り越える力、学び続ける力を身につけることができるため、今の努力は将来必ず役に立つと伝えていました。そして、「先生方の指導を受けながらしっかり乗り越えて、立派な玉川っ子として卒業してください」と、生徒たちに温かいエールを送ってくれました。



STUDENT COUNCIL



今月のIB Assemblyでは、今年度IBコミュニティに導入される新しいアイデアやプロジェクトの数々を紹介しました。House Systemのアップデートや今後開催されるコンテスト、そしてStudent CouncilやPrefectの募集についてなど、今回のプレゼンテーションでは「より多くの生徒が参加しやすい環境づくり」に焦点を当てました。

学年を越えてつながり、コミュニティの一員であることを心から楽しめるような学校づくりを、これからも目指していきます。

今年のIBは、単なる「勉強」の場としてだけでなく、教室の外で生まれる様々な経験、それはイベント、友情、挑戦、新しいアイデア、そして学校生活を忘れられないものにするすべての瞬間、これらを通じて記憶に残る場所にしたいと考えています。より多くの生徒が、自分自身のやり方で一歩踏み出し、新しいことに挑戦し、コミュニティの一員となってくれることを願っています。

あ、それから……校内に貼られたこれらの「WE WANT YOU」のポスターは、100%敢えてこのように作成しています！





KINGビジネスコンテストは、日本各地の大学生によって企画・運営され、玉川IB卒業生のK.K.さんにも支えていただきました。このコンテストを通して、私たちはわずか1日で実際のビジネスアイデアを創り上げるプロセスを体験する貴重な機会を得ることができました。大学生メンターとともに学年を越えた混合グループで活動し、私たちは「自分自身や家族、身近な人が経験している課題や不便を解決するビジネスプランを考案する」というテーマに挑戦しました。

各グループは異なる課題に着目しました。私たちのグループは、メンバーの一人が経験した困難をきっかけに、アレルギー対応食品へのアクセス向上をテーマとして取り組みました。調査や話し合い、既存の解決策の分析を通して、それぞれのグループが特定の課題を解決し、対象となる人々を支援するための提案を作り上げました。限られた時間の中で進める必要があり、多くの参加者にとって初めての経験でもあったため難しさもありましたが、現実的なビジネスアイデアを生み出すうえで、協働、コミュニケーション、そしてクリティカルシンキングの重要性を学ぶことができました。最後に、4分間のプレゼンテーションと質疑応答で審査員へ提案を発表したことは緊張しましたが、終えた時には大きな達成感を感じました。



コンテストを通して、私たちは異なる学年や背景を持つ生徒たちと意見を共有し、日常の課題に対して多様な視点を考えることで、IB学習者像の「コミュニケーションができる人」や「心を開く人」の資質を育むことができました。また、対象となる人々の分析や市場にある既存の解決策の評価を行う中で、協働スキル、リサーチスキル、思考スキルといったATLスキルも高めることができました。最も大きな挑戦の一つは、初対面の人たちとの話し合いの中で自信を持って意見を出すことでしたが、時間が経つにつれてチームワークは大きく向上しました。

今回のコンテストを通して、私たちはビジネスへの理解を深めるだけでなく、倫理的な課題解決力やプレゼンテーション能力も身につけることができました。これらの経験は、今後の学習機会や将来のキャリア、さらには今後のビジネスコンテストへの挑戦にも活かされる貴重な学びとなりました。





LEARNER PROFILE AWARDS



F.N. (G6) Knowledgeable, Inquirer - 常に万全の準備で授業に臨み、自ら理解したことを周囲と共有しています。数学的概念への深い理解に基づき、正確かつ効率的に課題に取り組む姿は、しばしば期待を上回るものです。自信を持って難問に挑む探求心を称えます。

M.O. (G6) Balanced, Communicator - 提出される課題は常に整理されており、数学的思考を提示する際、明快でたどりやすい構成にするための細やかな配慮が見られます。適切な数学用語を用いて解法や概念を説明する力は、自身の理解を効果的に伝える模範となっています。落ち着いて思慮深く課題に向き合い、自立した学習とクラス活動への積極的な参加を高い次元で両立させています。

K.F. (G7) Caring - 思いやりのあるクラスメートとして、Google Classroomからのリンクの開くことや資料のダウンロードに苦戦している仲間へ手を差し伸べ、クラス全員がスムーズに授業準備を整えられるようサポートしてくれました。

M.N. (G7) Knowledgeable - ユニット1における重要な数学的知識とスキルを確実に習得し、それらを正確に応用して問題を解決する力を示しました。

R.Y. (G8) Caring - 環境に対する奉仕 (Service) への真摯なコミットメントを示しました。Grade 6-8の遠足の際、自ら進んでゴミ拾いを行い、周囲の環境を整える行動を率先してとってくれました。

Y.O. (G8) Communicator - クラスの目標「Rocky "STRIVE"」を作り上げる過程において、献身的かつ粘り強く取り組み、目標の策定に大きく貢献しました。





LEARNER PROFILE AWARDS



S.O. (G9) Principled - 課題の本質を理解し、推敲を重ねることで自身が行う学習をより良くしていく高い能力を持っています。また、グループワークやコラボレーションにおける姿勢も大変優れています。これらの資質は授業中のみならず、ホームルーム活動や学校行事でも一貫して発揮されており、学習者として卓越した姿を見せてくれています。

R.K. (G9) Self-management - 理科の課題において、困難に直面しても「自分ならできる」という前向きな姿勢を失わないレジリエンス（折れない心）を示しました。周囲の誘惑に惑わされることなく自分自身でしっかり課題終わらせるために集中して取り組むことができました。

M.M. (G10) Inquirer, Risk-taker - 習得が難しいスキルに対しても、熱意と粘り強さを持って学習に取り組んでいます。自分たちで取り組む練習の時間には思慮深い質問を投げかけ、理解を深めるために積極的にサポートを求める姿勢が見られます。向上心を持ち、自らの考えを明確にしようと努力し続けることで、数学において目覚ましい成長を遂げました。

Y.K. (G11) Communication skills - 先日のIO（口述試験）やクラスでのプレゼンテーションにおいて、多様なスピーキング技術を駆使し、聞き手に合わせた効果的なコミュニケーションを実現しました。

B.I. (G12) Caring, Open-minded - EE（課題論文）のプロセスで直面した困難について、オープンマインドな姿勢で共有してくれました。その率直な経験談は、Grade 11の生徒たちが自身の選択を再考する大きな助けとなりました。また、CAS活動の「難民カフェ」では、下級生をきめ細やかにお世話し、異なる立場の人々の間を繋ぐ橋渡し役として見事に活動しました。

S.I. (G12) Inquirer, Communicator - 常にディスカッションを積極的にリードし、学習対象となる作品について深く、かつ批判的（クリティカル）に考察しようと真摯に取り組んでいます。





EXCHANGE STUDENTS

4月より、IB Divisionではカナダ、ドイツ、南アフリカ、アメリカ合衆国から交換留学生を迎えることができ、大変恵まれた機会となりました。

留学生の皆さんは、それぞれの学校を代表する素晴らしい姿勢を見せてくださり、多様な経験や新しい視点、アイデアをGrade 10の生徒たちにもたらしてくれました。

交換留学生の皆さんが安心して充実した時間を過ごせるよう温かく迎え入れてくださったホストファミリーの皆様、生徒の皆さん、そして先生方に心より感謝申し上げます。

今後、Grade 10の生徒たちがそれぞれの留学生の国を訪問する機会を通して、どのような経験や学びを得るのか、私たちも今からとても楽しみにしています。

P.M.さんとM.L.さんより、玉川学園での学校生活や日本での経験について振り返り、それぞれからのコメントをもらいましたのでご紹介いたします。



私はP.M.です。南アフリカのBridge House校からの交換留学生です。先日、玉川学園での7週間の交換留学を終えて南アフリカへ戻ってきましたが、正直なところ、日本で過ごした時間がどれほど素晴らしかったかを言葉で表現することはできません。

学校は本当に美しく、初めて登校した日のことを振り返ると、そのキャンパスの壮大さと美しさに圧倒されたことを今でも鮮明に覚えています。滞在最後の日まで、校内にはまだ新しい素敵な場所や、そこで行われている活動を発見し続けていました。また、学校中で日々行われている興味深いクラブ活動や取り組みに大きな刺激を受けました。

生徒の皆さんはとても親切で温かく迎えてくださり、私たちを仲間に入れようと本当に努力してくれました。バディではない生徒たちも、私たちの国との違いや共通点、互いの文化に関心を持って話しかけてくれたことがとても嬉しかったです。皆さんは私たちを温かく受け入れてくださり、まるで母国にいるような安心感を与えてくれました。

先生方についても、私にとって大きな憧れであり、刺激を与えてくださる存在でした。先生方は素晴らしい人柄であるだけでなく、本当に素晴らしい先生方でした。授業を通して多くを学び、そのおかげで私は以前にも増して意欲的に授業へ取り組むことができました。先生方は常に前向きで励ましに満ちた姿勢で接してくださり、その姿は周囲の生徒たちにも大きな影響を与えていたと思います。





EXCHANGE STUDENTS

帰国する頃には、とても寂しい気持ちになりました。たくさんの素晴らしい友人や先生方を残して帰るような気持ちになったからです。

もしもう一度機会があるなら、私は迷わずすぐに日本にまた戻りたいと思います。この経験は、これからもずっと忘れることなく、大切な思い出として心に残り続けたいと思います。

この交換留学を実現してくださった学校の皆様、いつも温かく支えてくださった素晴らしいホストファミリー、新しくできたたくさんの友人たち、そして関わってくださったすべての方々に心から感謝しています。



玉川で過ごしたすべての時間が本当に大好きでした。素晴らしい経験をありがとうございました。

P.M.



“Konnichiwa. Boku no nihongo ga amari jyoozu dewa nai desuga, o sewa ni nari mashita.

Tanoshi jikan deshita. Minna sugoku yasashiku shitekurete arigatou! Boku wa ramen to yunikuro to matcha ga daisuki ni narimashita.

こちらで過ごした時間は私にとって本当に特別なものでした。そして、その時間をたくさんの笑いと忘れられない思い出で満たしてくださった皆さんに心から感謝しています。

今回の日本への留学は、間違いなく私の人生の中でも最高の経験の一つになりました。この交換留学で経験したすべてのことが本当に恋しくなると思います。出会った人々、日本の食べ物、そしてもちろんセブンイレブンも含めてです。

改めて、皆さん本当にありがとうございました。先生方、そして電車の中でツナマヨおにぎりを食べてしまった私を国外追放しなかった駅員さん（車内マナー違反を大目に見てくださった方々）にも感謝しています。

日本と玉川で経験したすべての出来事や出会いを、これからもずっと大切に心に留め続けたいと思います。

M.L.



TRIAL LESSONS



先日実施したIB体験授業は、入学を検討されているご家族をお迎えし、玉川学園のIB Divisionでの学びや学校生活を体験していただく素晴らしい機会となりました。当日は約30組のご家族にご参加いただきました。また、来てくださった皆様にIBの学びを実際に感じていただけるよう、魅力的な体験授業を企画・実施してくださった先生方にも心より感謝申し上げます。



当日の大きな見どころは、何といても参加してくれた36名の生徒ボランティアの活躍でした。生徒たちはイベントを通して非常に模範的な姿勢を示してくれました。授業中には来校した生徒と一緒に活動に取り組み、課題のサポートを行ったり、必要に応じて言語面で支援したり、先生方の授業運営を手伝ったりしながら、全員が安心して参加できる環境づくりに貢献しました。

また、授業以外の場面でも、生徒たちは玉川学園を代表する素晴らしいアンバサダーとして活躍してくれました。生徒たちは親しみやすく、積極的にコミュニケーションを取りながら、来てくださったご家族と会話をし、学校生活や学習経験、IBで学ぶことについての質問に一つ一つ丁寧に答えていました。その温かく前向きな姿勢によって、訪問されたご家族に安心感を与え、玉川学園での日常をより身近に感じていただくことができました。



TRIAL LESSONS



何より、生徒たちは玉川学園の魅力を大変前向きに発信してくれました。自ら行動して周囲を支えるリーダーシップ、役割を最後まで果たす責任感、そして訪問者を温かく迎え入れるコミュニティを大切にする姿勢を示してくれました。これらの姿は、IBの理念と玉川学園の全人教育の価値観を体現するものであり、思いやりを持ち、主体的に行動する若者の育成につながっています。

私たちは、生徒たちが見せてくれた姿勢、熱意、そして高い責任感を大変誇りに思っています。そして今回の姿が、他の生徒たちにも良い影響を与え、一人ひとりが自分らしい最善を発揮し、温かく支え合う玉川コミュニティをこれからも築いていくきっかけになることを願っています。





PARENTS CLASS OBSERVATION DAY

5月13日、IB Divisionでは保護者授業参観が行われ、多くの保護者の皆様をお迎えすることができました。保護者の皆様にご授業をご見学いただき、児童生徒たちが日々取り組んでいる学びを直接ご覧いただけたことを大変嬉しく思います。

授業参観では、IB Divisionで日々行われている多様な学習活動や体験、児童生徒同士や教員との関わりについて、保護者の皆様により深く知っていただくための貴重な機会です。当日は、協働的な学習や探究活動、実践的な活動、児童生徒による発表などを通して、それぞれの学びの様子をご覧いただきました。多くの保護者の皆様も一緒に授業に参加して下さる姿もあり、大変嬉しく思いました。

授業参観後には、保護者の皆様を対象とした進路説明会、上級生向けの教育説明会を実施しました。前半はカレッジカウンセラーの常盤さんと2名のIB卒業生が大学選びについての経験やアドバイスについて話し、出願プロセスや卒業後の進路について貴重なお話となりました、また、公判ではFurnival先生は人工知能（AI）についてのプレゼンテーションを行い、児童生徒が授業やアセスメント（評価課題）においてAIをどのように活用できるのか、また活用できないのかについて説明しました。



ご参加いただいた保護者の皆様には、心より感謝申し上げます。家庭と学校との強い連携は、児童生徒の学習と成長を支えるうえで非常に重要な役割を果たしています。

また、当日はアンケートにもご協力をお願いしました。次のページでは父母会副会長のお二人からも当日の感想をいただきました。保護者の皆様からいただくご意見やご提案を大切にしており、多くの貴重なご意見をいただきました。今後の保護者授業参観日をさらに充実したものにするために活用させていただきます。

改めまして、IB Divisionへの温かいご支援とご協力に感謝申し上げます。





PARENTS CLASS OBSERVATION DAY

父母会 Ms.S

先日の授業参観では、学齢を重ねるごとに落ち着きと頼もしさを増していく生徒の姿に深い感慨を覚えました。教科ごとに異なる学びの中で、互いの考えを尊重しながら自然に意見を伝え合う様子が印象的で、生徒たちが伸びやかな雰囲気の中で学んでいる姿に心が和みました。

また、幼少期から知っている生徒たちからの明るい声かけや、少し照れたような挨拶にも成長が感じられました。日頃より温かく導いてくださる先生方に感謝申し上げます。

父母会 Mr.K

日本語でも決して容易ではない学習内容を、英語で平然とこなす生徒たちの姿には、ただただ感服いたしました。これほどの語学力を身につけられる環境を整えてくださった先生方には、感謝の念に堪えません。

数学の授業では、数十年前の自分の経験とは全く異なるアプローチに新しい発見があり、非常に刺激を受けました。その一方で、専門性の高い理科や、日本の経済・歴史を扱う社会の授業を英語で学ぶことの意義については、改めて深く考えさせられるきっかけとなりました。

語学の習得のみがすべてではないと考える中で、母国語で学ぶ授業が今後どのように進化し、深まっていくのか。これからの授業参観も非常に楽しみにしております。





5月10日（日）に開催された「第77回東京都中学校地域別陸上競技大会多摩大会」において、陸上競技を代表して出場した8年Y.H.さんが見事な快挙を成し遂げました。

彼女が出場した「多摩西部女子共通100mハードル」は、学年の枠を越えて中学1年生から3年生までの生徒が競い合う非常にレベルの高い種目です。その中で彼女は16秒35という好タイムを記録しました。全体で第6位に入賞するという栄誉を手に入れました。



この結果により、6月末と7月下旬に開催される都大会への進出が決定しました。

彼女以外にも多くの中学生部員(Secondary)が都大会進出を果たしています。今週末の同大会には、IBの7年生も公式大会に初出場します。

(IB生徒ではありませんが、同日に別会場でおこなわれた高校生の都大会では、男子やり投げにおいて6位に入賞して南関東大会の出場権を獲得した部員もいます。その翌週には、女子混成7種競技で8位に入賞した部員もいます。)



DEPARTMENT FOCUS: LANGUAGE A

【新連載】今月から始まるこのコーナーでは、カリキュラムの枠を超えて日々行われている活動の様子を、児童生徒たちの視点でお届けします。記念すべき第1回目は、「言語と文学 (Language and Literature)」の授業にスポットライトを当てます。

私たちは英語の言語と文学の授業で、ロイス・ローリー著『The Giver』を読んでいます。この作品はディストピア文学の一例です。ディストピア作品とは、社会のあらゆることがうまくいかなくなってしまった世界を舞台にした物語です。この物語では、最初はすべてが完璧に見えますが、読み進めるうちに、それが決して本当ではないことに気づきます。私たちは、この物語が自分たちの生活とどのように似ていて、どのように異なるのかを考え、自分たちが生きる世界への感謝の気持ちを持つためにこの本を読んでいます。また、この本を通して、個性や自由が私たちの人生においてどれほど大切であるかを学んでいます。

私たちは皆、『Giver』を読んだり話し合ったりすることを楽しんでしています。読解活動や自分の意見を書く活動では、正解や不正解はありません。それぞれが異なる解釈や創造的な考えを持っています。自分の考えを共有することが好きですし、他の人の視点を理解することはとても大切で興味深いことだと思います。私たちは、深い意見を考え出すために、「思考スキル (Thinking Skills)」と「コミュニケーションスキル (Communication Skills)」というATLスキルを活用しています。これにより、作者の意図やディストピア作品の裏に隠された意味について、より深く理解することにつながると思います。

私が英語の授業で特に好きなことの一つは、先生が単に本を読むだけでなく、社会や人間の本質について深く考えるように教えてくれることです。もし私たちが理解に苦しんだり混乱したりしたときには、先生は将来の学習にも役立つ実践的で的確なアドバイスをしてくれます。

S.Y. - Grade 7 English Language Literature

今月、IBDPの「English Language and Literature (英語・言語と文学)」の授業では、小説『Things Fall Apart』と『Chronicle of a Death Foretold』、そしてドキュメンタリー映画『Tough Guise 2』を読み解き、直近では雑誌『Men's Health』の表紙についても考察しました。扱うテキストはそれぞれ大きく異なりますが、どれも「社会がどのように男性らしさの概念や期待を構築しているか」を示しているという共通点があります。

このコースで気に入っていることの一つは、クラスでのディスカッションです。読み手や分析する人によって、一つのテキストから異なる解釈が生まれるのがとても面白いと感じます。こうした多様な視点に耳を傾けたり、自分の中に新しい考えが浮かんだりすることは、テキストをより深く理解し、ATLのコミュニケーションスキルやクリティカルシンキングを養うことにつながっています。ディスカッションのおかげで、自分一人では思いつかなかったような視点に気づかされることもよくあります。

また、クラスの前でプレゼンテーションを作成・発表することもとても楽しいです。自分の考えを人に伝える(教える)ことで、自分自身の理解がさらに深まるからです。特に発表後の質疑応答の時間は、自分の知識や分析の甘い部分に気づかせてくれるため、非常に役立っています。もちろん、文学分析やエッセイライティングといった難しい部分もあり、これらは昔から私にとって大きな課題ですが、だからこそ「もっと向上させたい、努力を続けよう」というモチベーションになっています。

総じて、このコースは楽しさと難しさの両方がありますが、単に文学を学ぶ以上のものを確実に与えてくれます。他の教科ではあまり使わないような方法で、クリティカルシンキングを応用する力が身についたと感じています。

Y.K. - Grade 11 English Language and Literature



DEPARTMENT FOCUS: LANGUAGE A

9年生のJapanese AのUnit 1では「時代を超えて変わらないもの」というテーマで古典作品『おくのほそ道』の分析を行いました。授業では生徒自身が本文解説の発表に取り組み、作者松尾芭蕉の旅への想いや時代的背景、意図、現在との繋がりなどといった様々な観点から作品を読み解きました。

また、作品においての作者の感動や価値観について論述したアセスメントも実施し、「なぜ芭蕉はこの場面に心を動かされたのか」について考察し、作者の感動における普遍性についても触れました。

これらの過程で、俳句紀行文という現代とかけ離れた古いジャンルの中にも自分たちが共感できる考え方や感情を見出すことを楽しみました。グループで文学分析や解説をする際にATLスキルのリサーチ力やコミュニケーション力を活用し、論述のアセスメントを準備していく際にLearner ProfileのInquirer（探究する人）やReflective（振り返る人）にもつながる学びがありました。

Y.K. - Grade 9 Japanese A

現在、国語の授業ではSLで戯曲『人形の家』、HLで長編小説『わたしを離さないで』を学習しています。どちらの作品も現代社会とは異なる時代や設定を描いていますが、クラスで分析していくなかで、現代にも通じる社会問題や人間関係、価値観について考える機会が多くありました。

特に、『人形の家』で行った劇ではインタビューパートがあり、それぞれの登場人物の立場や考えを分析しながら、自分たちの解釈を発表しました。実際に演じたり意見を共有したりすることで、作品への理解をより深めることができたと感じます。また、多くの人の前で発表することはRisk-Takerと繋がる部分があると思います。自分の考えを表現する力を養う貴重な経験となりました。

さらに、『人形の家』の歴史的背景や『わたしを離さないで』が提起する倫理的な問題について学ぶことで、Knowledgeableとしての視野を広げることができました。これからも文学作品を通して、多様な価値観について考え続けていきたいと思っています。

S.S. - Grade 11 Japanese Literature



DEPARTMENT FOCUS: LANGUAGE A

私たちは現在、「自分らしさを伝える工夫」というユニットを行っています。日本のお札について分析していて、最後に説明文を書きます。4月は、日本の現在のお金の分析と昔のお札と現在のお札との分析、5月には、世界との比較と世界のお金の分析をしました。練習では、玉川学園のお札を作り、新しい肖像を考えました。最後のアセスメントでは、新しい日本のお札の肖像を考え、説明文を書くので、その練習をしています。

私は個人的に、今と昔でお札はどのように違い、どのようなところが似ているかを知ったり、世界のお札は、日本と違うものや人が書かれていることを知ったりすることを楽しく思います。この授業を通して、最初は日本のお札の肖像がどのように選ばれるかなど考えたことがなかったのですが、今回この単元を通してお札を使うときによく見て観察するようになりました。クラスメートが、授業に日本の昔のお札を持ってきてくれて、昔のお札は今と似ているところもあれば進化しているところもあることがわかって改めて実物を見て関心しました。実は、分析を苦手意識を持っていたのですが、今この単元を得て少しずつ苦手意識を改善しています。

私は、この単元で分析する力を付けるために、Thinking skill と Communication skillを習っています。Thinking skill については、違うお札を分析をしていて、それらのお札が選ばれた理由などを考え、今までにないアイデアを本番のテストで出すために使います。Communication skillについては、ペアワークなどから他の人からのアイデアや視点の考えをもらい、そのうえ自分のアイデアと比較して他の人の視点も取り入れながら学びました。歴史なども触れるので Reflectiveだと思えます。

日本語の言語と文学のクラスは、主に日本語を深く理解したうえで分析をするクラスです。学んだことは、日常生活のちょっとした会話から広い分野まで活かします。今まで、説明文と分析が苦手でしたが、今回作文をもう一度改めて書いたことによって、説明文を書く楽しさを感じることができました。小学生の時の苦手だった、作文、説明文、分析を克服することを頑張っています。

L.K. - Grade 7 Japanese A



DEPARTMENT FOCUS: LANGUAGE A

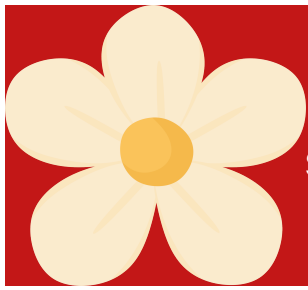
「言語と文学 (Language and Literature)」の授業では、「ハリソン・バージェロン」や「夏は一日だけ」といったディストピア短編小説を学習しました。私たちは、著者が「視点 (Point of View)」や「テーマ」をどのように活用し、社会的に作られた現実という概念に疑問を投げかけているかを探求しました。これらの作品を読み解くことで、支配、従順、権力、そして自由といった概念が、いかに社会を形作っているかを分析しました。特に興味深かったのは、語り手の視点によって、読者の物語に対する理解がどのように変化するかを学んだことです。様々な文学技法を詳しく見ることで、普段は当たり前だと思っている前提に対して、著者がいかに読者に問いを投げかけているかを知ることができました。

このユニットで一番楽しかったのは、自分自身のディストピア短編小説を創作したことです。アセスメント (評価課題) として、授業で学んだアイデアやテーマを取り入れながら、オリジナルの物語を作りました。キャラクターやあらすじ、そして物語の世界観を自分一人で作り上げるプロセスは本当に楽しかったです。伝えたいメッセージを慎重に考えつつ、自由にクリエイティビティを発揮することができました。普段は読者の視点で物語を分析することが多いので、作者の視点に立って書くという経験はとても新鮮でした。この経験を通して、読者を惹きつけながら意味のあるメッセージを伝える物語を書くことは、想像以上に難しいことなのだと学びました。

このユニットを通して、いくつかのATLスキルを伸ばすことができました。ディストピア小説を分析し、「なぜ著者はこの表現を選んだのか」「それが読者にどう影響するのか」を考えることで「思考スキル」を活用しました。また、クラスディスカッションで自分の解釈を共有し、異なる視点に耳を傾けることで「コミュニケーションスキル」も養われました。さらに、社会システムが人々の思考や行動、自由にどう影響するかを疑うことで、IB学習者像の「探究する人 (Inquirers)」としての姿勢を示すことができました。ディストピア小説の読解と創作は、社会についてより深く考えるきっかけとなり、文学がいかに現実世界の課題を反映し、またそれらに一石を投じるものであるかを理解する助けとなりました。

M.S. - Grade 9 English Language and Literature





S.Y., R.Y. and S.S.

MOTHER'S DAY CHARITY BOUQUET PROJECT

— 母の日チャリティーブーケプロジェクト —



このプロジェクトでは、母の日に向けてハンドメイドのブーケ（花束）を販売しました。合計64個のブーケを完売し、25,320円の利益を上げることができました。5月8日の昼休みに向けて、私たちは自分たちで一つひとつ丁寧にブーケをアレンジしました。また、お花を市場から直接仕入れを行ったことで、新鮮なお花を低価格で提供することができました。

私たちの活動の目的

感謝の輪を広げる：この取り組みを通じて、身近な大切な人へ立ち止まって感謝を伝えるきっかけを作りたいと考えました。

価値ある活動への寄付：このプロジェクトで得られた利益はすべて、開発途上国や離島、被災地など、十分な医療を受けることが困難な地域で医療支援を行っている団体「ジャパンハート（Japan Heart）」へ寄付されました。

ブーケを購入してくださった一人ひとりの行動が、身近な誰かを笑顔にただけでなく、世界のどこかで医療を必要としている人々を救う力となったのです。

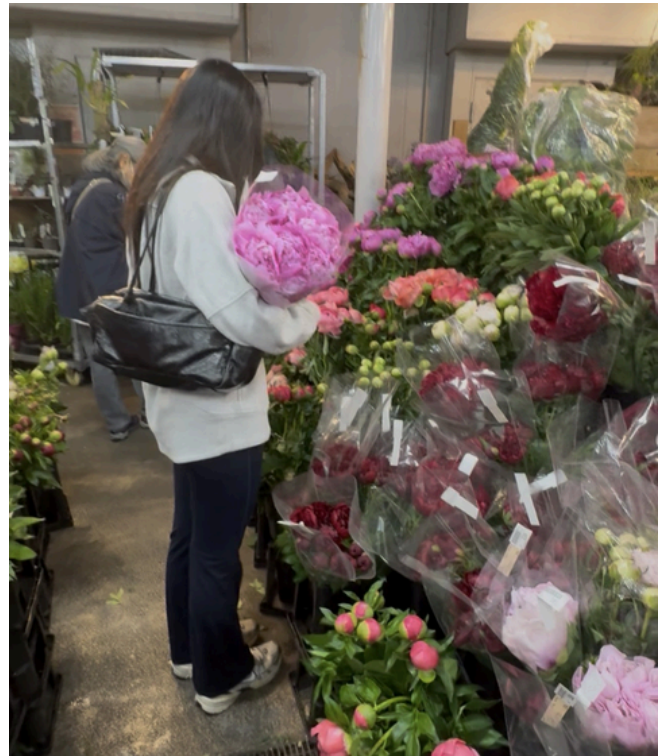
私たちが学んだこと

プロジェクト終了後、ブーケを受け取った方々や購入した生徒たちから、たくさんの温かい感謝の言葉をいただきました。この活動を通じて、誰かに優しさを届ける喜びを学ぶことができました。

また、64個ものブーケを準備する過程で、責任を持って最後までやり遂げることの大切さを実感しました。さらに、実際に商品を販売することで、経済の仕組みについても学びました。寄付のための利益を生み出すには、予算、価格設定、宣伝戦略を慎重に考える必要がありました。ブーケの原価や販売価格を決定することは、想像していたよりもずっと難しい挑戦でした。

結びに

最後に、このプロジェクトに参加してくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。私たちのこの活動が、誰かにとって次の一步を踏み出すインスピレーションとなれば幸いです。





B.I.

SOPHIA REFUGEE SUPPORT GROUP

SRSGとは？

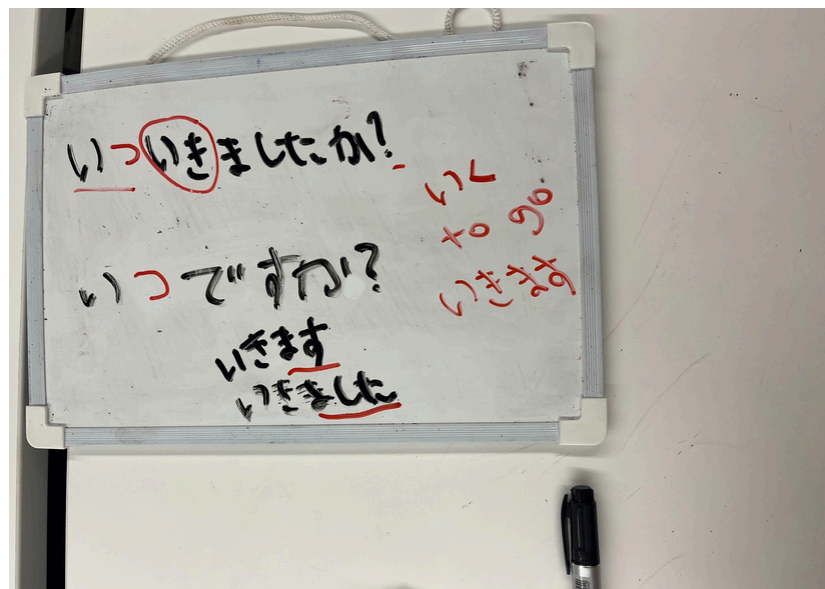
Sophia Refugee Support Group (SRSG) は、上智大学の学生が中心となって活動している非営利団体です。日本で暮らす難民の方々に希望を届けることを目的としています。

難民の方々は、母国ではない日本の社会において、孤独や社会的なプレッシャー、そして慣れない環境による多くの困難に直面しています。SRSGは、こうした「見えない壁」を取り払うために、難民の方々への日本語指導や、交流の場である「難民カフェ (Refugee Cafe)」を通じた絆づくり、さらには食料や衣類の寄付といった活動を行っています。

活動のきっかけ

私は、習得が難しいとされる「第二言語」の学習において、難民の方々をサポートしたいと考えました。私の授業では、単に知識を伝えるだけでなく、楽しく、かつ教育的で相互作用（インタラクティブ）のある方法で日本語を教えています。私のゴールは、彼らがSRSGの場以外でも自信を持って過ごせるような日本語を身につけてもらうことです。

以前、私が日本語を教えた生徒の一人が、無事に仕事の面接に合格しました。その報告を聞いたとき、共に成し遂げた成果こそが絆を強め、コミュニティを形作っていくのだと強く実感しました。



私の役割

私は、日常的な日本語の会話や、就職面接で必要となる対話スキルの指導を担当しています。初めて日本語を学ぶ生徒には、まずアイスブレイクのアクティビティで緊張をほぐし、理解度を確認した上で、それぞれのレベルに合わせて語彙や文章の組み立て方を教えています。

また、この団体は難民の方々が直面する「言葉の壁」の解消を目的としているため、実用的なサポートも行っています。例えば、医療機関の書類といった、漢字が多く含まれる複雑な書類の記入方法なども指導しています。

私の学び

SRSGに参加して1年半近くになりますが、ここでの難民の方々との経験は、単なるCAS活動という枠組みを越えたものになっています。私は、コミュニケーションがいかにより「誰かを助けるための手段」となり得るかを実感しました。

直接的な助けを必要としている人と対話を重ねることは、未知の事柄にあふれた場所で暮らす彼らに、安心感や思いやり、そして心地よく生きていくための自信を届けることにつながるのです。



知の最前線をゆく：2026年 WSC 東京大会

ワールド・スカルーズ・カップ（WSC）は、批判的思考（クリティカル・シンキング）、協力的な問題解決、そして多角的な学びを称え合う世界規模の祭典です。約180チーム、500名を超える非常に意欲的な生徒が集結した東京大会において、チーム362は、2026年度の共通テーマである「Are We There Yet?（私たちは目的地に着いたのか?）」を深く探求する過酷な知の旅に挑みました。

この大会で成功を収めるためには、科学技術、歴史、芸術・音楽、文学、社会、そして特別分野の「食の未来」に至るまで、多岐にわたる高度なカリキュラムをマスターしなければなりません。彼らは、チーム・ディベート、コラボレーティブ・ライティング（共同執筆）、スカルーズ・チャレンジ、そして熱気あふれるクイズ形式のスカルーズ・ボウルという、ハードな4つの主要種目でその実力を試されました。

徹底した準備と抜群のチームワークの結果、チーム362はシニア部門で数多くの金メダルと銀メダルを獲得するという驚異的な快挙を成し遂げ、見事、世界大会（Global Rounds）への出場権を獲得しました。

【チーム部門結果】

Team Writing: 金メダル（第15位）

Team Bowl: 金メダル（第26位）

Team Challenge: 金メダル（第28位）

Team Debate: 銀メダル（第46位）

【個人ライティング部門結果】

K.M.: 42位 (Gold)

S.I.: 61位 (Gold)

E.I.: 69位 (Gold)

【個人ディベート部門結果】

E.I.: 112位

K.M.: 125位

S.I.: 208位

成長と次なるステージへ

今回の経験において、獲得したメダル以上に価値があったのは、それぞれの「個人としての成長」です。「緊張から自信へ」と変化を遂げる中で、彼らは深く耳を傾け、柔軟に考え、そして互いの唯一無二の強みを信じることを学びました。

世界の強豪たちが集う世界大会（Global Round）に向けて、彼らの進むべき道は明確です。東京大会での成功を糧に、さらにスキルを磨き上げ、好奇心と誇りを胸に次なる挑戦へと踏み出します。



**BOOK RECOMMENDATION**

Mr. Furnival が選んだ:

Fantastic Mr. Fox by Roald Dahl

ロアルド・ダール作『すばらしき父さん狐』

この本には、サスペンスと巧妙な作戦、そして心に残るキャラクターが凝縮されています。特に、勇敢で知的な主人公の「父さん狐 (Mr. Fox)」が放つ、「決してあきらめないぞ」という言葉は読者の心に強く響きます。

物語の中で特にエキサイティングなのは、3人の農場主たちがシャベルやトラクター、さらには銃まで持ち出してキツネたちの住む丘を包囲し、父さん狐とその家族を捕まえようとする場面です。しかし、父さん狐は決してあきらめませんでした。彼は知恵と勇気を振り絞って秘密の地下トンネルを掘り進め、飢えに苦しむ仲間たちを救おうとします。そして農場主たちの目を盗んで食べ物を拝借し、お腹をすかせた動物たち全員に分け与えるのです。

動物たちが地下に閉じ込められ、食べ物も底をつきかけるこの場面はスリル満点ですが、父さん狐は常に冷静で勇敢です。この章にある、「あいつら（まぬけな農場主たち）の臭いなら、1マイル先からでもわかるさ」という彼のセリフからは、危機的な状況にあっても失われない自信と賢さが伝わってきます。地下への脱出劇と秘密のトンネルでの冒険は、ハラハラすると同時に、思わず笑ってしまうような楽しさに満ちています。

この物語は、チームワーク、忍耐、思いやり、そして大切な人を守ることの重要性を教えてください。読者はすぐに、賢い動物たちと「ボギス、バンス、ビーン／ひとりにはデブで、ひとりにはチビで、ひとりにはガリガリ (Boggis and Bunce and Bean / One fat, one short, one lean)」と表現される3人のひどい農場主たちとの戦いに引き込まれていくことでしょう。物語の終盤で父さん狐が誇らしげに語る「みんな、これは素晴らしいご馳走だ (My children, this is a fantastic feast)」という言葉は、私たちに感謝の気持ちや家族の絆、そして分かち合うことの大切さを思い出させてくれます。

ロアルド・ダールが世界で最も有名な児童文学作家の一人である理由は、彼の作品がユーモア、冒険、想像力、そして忘れられないキャラクターを兼ね備えているからです。彼の物語では、子どもたちが知恵と勇気、そして創造力を駆使して、理不尽な大人たちを打ち負かす姿がよく描かれています。私自身、自分の子どもたちと一緒にロアルド・ダールの本を読むのが大好きでした。私の子どもたちも『マチルダ』や『チャーリーとチョコレート工場』、『BFG (オ・ヤサシ巨人)』が大好きです。

ロアルド・ダールの本は、楽しみながらスラスラと読めるだけでなく、豊かな想像力や共感性、問題解決能力、そして「物語」を愛する心を育んでくれるため、Grade 6の皆さんには特におすすめしたい作品です。

ワクワクして、ユーモアたっぷり、そして想像力をかき立てる物語!





EDC(英語劇部)に入った理由は?

私がEDCに入った一番の理由は、玉川学園に入学する前から先輩方のパフォーマンスに強い憧れを抱いていたからです。部活に入れるのは9年生からだったため、小学生の頃は自由研究として英語劇に参加していました。その頃から、英語劇部として活動している先輩方の練習や本番を見に行く機会があり、仲間と情熱を持って作品に取り組む姿や、自分の好きなことに全力で向き合っている姿にとっても惹かれました。自分もこんなふうになりたいと強く思ったことを今でも覚えています。

パフォーマンス(表現すること)のどんなところが好きですか?また、どのような種類のパフォーマンスが好みですか?

私は、演じる側の心も観客の心も動かす力があるミュージカルが大好きです。音楽を通して自分の感情を表現したり何かになりきることに楽しさも覚えますし、演じている仲間とはもちろんお客さんとも一体感を感じることができます。また、練習してきたことを全力で出し切ったりして、観客席から拍手が聞こえたり仲間の笑顔が見えたりすると、大きな達成感を感じます。

Greatest Showmanをやることになった理由は?

この演目を選んだ理由は、今年度卒業する12年生全員が、卒業公演として最もふさわしい作品だと満場一致で感じたからです。

また、私たち12年生全員が単純にこの作品が好きであり、このミュージカル映画から何度も勇気やエネルギーをもらってきたことも大きな理由の一つでした。作品に込められたメッセージや力強い楽曲に励まされてきたからこそ、最後の卒業公演という特別な舞台上、自分たちが力をもらってきた作品を通して観客にもそのエネルギーを届けたいと思いました。

『Greatest Showman』には、個性豊かなキャラクターたちがそれぞれの葛藤を乗り越え、自分らしく輝ける場所を見つけていくというテーマがあります。私たち12年生も、先輩方から「個性豊かな学年」と言っていただくことが多く、それぞれ異なる強みや個性を持っていると感じていました。だからこそ、それぞれが違う悩みや壁に向き合いながら、自分自身の個性を見つけて成長してきたのだと思います。そんな私たちが、『Greatest Showman』を通して自分たちの培ってきた能力や個性を堂々と表現できることに大きな意味があると感じ、この作品が最適だと思いました。



さらに、この作品には、仲間を思う気持ちや身近にある愛情を忘れてはいけないというメッセージも込められていると感じています。卒業公演である今回のパフォーマンスを通して、同級生、先輩、後輩、先生方、親、放送舞台技術の皆さんなど、支えてくださった全ての方々への感謝を伝えたいという思いもありました。そして最後まで結束し、全員でやり遂げたいという気持ちも、この作品に重なっていました。

また、『Greatest Showman』は最後を明るく前向きに締めくくる作品であり、全員で“*This is the Greatest Show*”と歌って終わります。卒業公演では、重く暗い結末の作品が選ばれることも多いですが、この作品なら最後の公演を達成感と自信を持って終えることができると感じたことも、大きな理由の一つでした。



練習はどのように行われましたか？

今回の公演は卒業公演でもあったため、プリンシパル役は12年生のみでオーディションを行い決定しました。一方で、万が一12年生が練習不足や実力不足、トラブルなどで出演できなくなった場合に備え、後輩にもアンダースタディとして役を担当してもらいました。そのため、プリンシパルという役に対しては責任感を持って向き合いました。また、プリンシパル以外の役については、私たち12年生が後輩たちのオーディションを見て、コーチと相談しながら決定しました。

練習が始まる前から、12年生は舞台構成、ダンスの振り付け、台本、音源制作、ハモリの音作りなど、公演準備を主体的に進めていました。練習開始後も、衣装や小道具の制作など、出演以外の仕事も全て生徒中心で進めていたため、部員同士で何度も話し合いを重ねながら、細かく計画を立てて準備を進めました。

練習の序盤では、主に歌の完成度を高めることに集中し、その後徐々にダンス、表情、セリフ、演技を加えながらシーンを完成させていきました。また、練習のモチベーションを維持し、全体の完成度を高めるために、途中で歌ゲネやダンステストを実施しました。定期的に成果を確認する機会を設けることで、一人一人が自分の課題と向き合い、より主体的に練習へ取り組める環境を作ることを意識しました。

また、12年生は先輩として後輩へのフィードバックにも力を入れました。ただ口頭で改善点を伝えるだけでなく、ダメ出しをドキュメントとして整理したり、実際の動画を用いて具体的に共有したりすることで、より分かりやすく伝わるよう工夫しました。

中盤には、役について深く分析し考察する「役レポート」にも取り組みました。ここでは、自分の演じるキャラクターだけでなく、その役と関わる他のキャラクターや部員との関係性についても深く向き合うことができました。

同時に、新9年生の仮入部員を迎えて最初の公演でもあったため、後輩への指導も並行して行いました。終盤には、卒業された先輩方から多くのアドバイスをいただき、同級生とも積極的に意見交換を行いながら、何度も通し練習を重ねて完成度を高めていきました。また、放送舞台技術の方々とも相談しながら、音源を流すタイミングや照明演出について細かく調整を行いました。

公演を振り返って....

今回の公演は、想定よりも短い約1か月という限られた準備期間だったこともあり、序盤は練習が思うように進まず、予想外の出来事や壁に直面することも多くありました。その中で、不安や焦り、苛立ちを感じることもありました。しかし、その経験を通して、改めて他者と意見や気持ちを共有することの大切さを強く実感しました。話し合いを重ねることで、自分にはなかった視点を得られたり、改善点や自分が今やるべきことを整理できたり、お互いに補い合って負担を軽減できたりと、協力することの価値を身をもって学ぶことができました。

また、私自身も挑戦的な役を演じる中で、特にソロパートに悩み葛藤することがありました。しかし、その過程で自分の等身大の実力を理解し、それを受け入れた上で、自分にできる最大限のパフォーマンスを作り上げることの大切さも学びました。

さらに、12年生として公演全体をまとめ、練習を進行しながら後輩一人一人にも目を向ける必要があったことで、集団を率いることの難しさも強く実感しました。自分たちがただ良いパフォーマンスをするだけでなく、部全体の雰囲気や成長、モチベーションまで考えながら行動しなければならず、リーダーシップには責任感と周囲への配慮の両方が必要であることを学びました。

たくさんの練習を積み重ねたからこそ、最後に全員の熱気を感じてスポットライトを浴びながら“*This is the Greatest Show*”と歌いきり、お客様から大きな拍手や歓声をいただいた時は、大きな達成感を感じることができました。



Get to know YOUR teacher!

先生のことを知ろう!



"I LOVE STAR WARS!"

スターウォーズが大好き!

Mr. SOAI

Q.どこで育ちましたか?

A.横浜で生まれ、埼玉県新座市で育ちました。

Q.教師になろうと思ったきっかけは何ですか?

A.私は中学生の頃、2年半ほど玉川学園のキャンパス内にある男子寮で生活していました。時折、友人から宿題について聞かれることがあり、勉強を教えると、みんなが喜んで「ありがとう」と言ってくれたことがきっかけです。

Q.どの教科を教えていますか?また、その教科のどんなところが好きですか?

A.I&S (社会) です。I&Sの授業はとても活気に満ちていて、刺激的です。私たちの生活に深く関わっている教科であり、私自身、世界中のニュースを追いかけるのが大好きです。

Q.先生の教科で成果を出すために、生徒にどのようなアドバイスがありますか?

A.毎日ニュースをチェックすること。そして、できれば毎日新聞を読むことです。

Q.玉川学園の生徒のどんなところが一番好きですか?

A.根がとても優しく、相手を尊重する心を持っているところです。

Q.玉川学園で働く一番の魅力は何ですか?

A.私は玉川の卒業生ですので、教職員や生徒、そしてこの環境すべてに深い親しみを感じています。私が世界とのつながりを築くことで、後輩たちにより多くの利益 (チャンス) を還元できると考えています。私は「世界」と「教室」を繋ぐ架け橋になりたいのです。

また、ニューヨークの国連本部でのインターンシップ経験を通して、多様性に富んだ環境で働くことが自分にとって最高の喜びであると確信しました。

Q.好きな学校の行事は何ですか?

A.私の好きな学校行事はペガサス祭です。

Q. IB学習者像の中で最も大切だと思う資質はどれですか?また、その理由は何ですか?

A.心を開く人 (Open-minded) & コミュニケーションが取れる人 (Communicator)。日本の人口が減少していく中で、これからの生徒たちは、国内にいても多様な人々が共生する社会で働いていくことになります。彼らは、そうした新しい社会に向けて準備をしていかなければなりません。



Q.授業の中でどのようにグローバルな視点を育てていますか？

A.現在の世界で起きている日々の事象（フェノメナ）を、歴史的背景と共に紐解き、紹介しています。

Q.ご自身についての意外な一面を教えてください。

A.スターウォーズが大好き！

Q.あなたのお気に入りデザートは何ですか？

A.シュークリーム

Q.あなたのお気に入りのおやつは何ですか？

A.コーンポタージュ味のお菓子

Q.好きな料理（よく作られる料理）は何ですか？

A.広島風お好み焼き

Q.これまでに行った中で一番好きな都市はどこですか？

A.アメリカ・ニューヨーク

Q.好きな旅行先はどこですか？

A.軽井沢

Q.あなたのお気に入りの映画は何ですか？

A.スターウォーズシリーズ（一番好きなのはローグ・ワン）、ノンフィクションならシンドラーのリスト

Q.あなたの好きなテレビ番組は何ですか？

A. Monday Late Show

Q.あなたの好きな曲は何ですか？

A. Official髭男dismのLaughter

Q.あなたの趣味は何ですか？

A.テニス、ピククルボールをやること、映画鑑賞

Q.一番好きな週末の過ごし方は？

A.自然の中へ行くこと。特に、山の方へ出かけるのが好きです。

Q.好きなスポーツ（する・観る）は何ですか。

A.テニス

Q.新しいことを学ぶ際に好きな学び方は何ですか。

「体験」することです！私は体験学習（エクスペリエンシャル・ラーニング）が好きです。なぜなら、実際に体験した後だと、脳の中にイメージを描くことが容易になるからです。私にとって、脳内でビジュアル化できないことは、本当に理解したことにはなりません。

また、アメリカの教育家・哲学者であるジョン・デューイも「習うより慣れろ（Learning by doing）」を提唱していますが、私自身もこれこそが最も実りある（生産的な）学習方法だと確信しています。

